



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	科学とアートのコミュニケーションが始まる
Author(s)	大友, 良英
Citation	科学技術コミュニケーション, 22, 59-70
Issue Date	2017-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67962
Type	other
File Information	06_ootomo_59-70.pdf



科学とアートのコミュニケーションが始まる。

大友 良英¹

A Communication Between Science and Art Begins.

OTOMO Yoshihide¹

キーワード：科学，アート，音楽，札幌国際芸術祭

Keywords: science, art, music, Sapporo International Art Festival

1. はじめに

大友です。よろしくお願いします。僕は、今年の8月6日から10月1日まで開催する、2回目の「札幌国際芸術祭 2017」(Sapporo International Art Festival；以下 SIAF2017) でゲストディレクター、要するに芸術監督を務めております(図1)。北海道大学は広大な敷地も持っていますし、すごく面白い場所で、なんとか一緒にできないかということで、こうして僕自身が講義をするようになったと同時に、「SIAF 2017」のほうでも吉増剛造¹⁾さんの展示を博物館でやることになったりして、これから徐々に北大との関係が深まっていけば良いなと思っています。

今日は皆さんにとっては、一般の方ももちろんいらっしゃると思うのですが、2017年度のCoSTEPの最初の講義になると思います。科学の専門家では決していないので、そっちの方面からのアプローチはできませんが、ただ、音楽の専門家として、しかし音楽以外の、こうして芸術祭のディレクターを務めるような仕事もする関係で、いろいろと境界を超えるというか、違う人たち、違うジャンル、あるいは違う世界と、どうコミュニケーションしていくかということに関して、今日はお話できればと思っています。

最近、「音楽と美術のあいだ」(大友 2017) という本を出しました。これは、札幌芸術祭に合わせて出したわけでも何でもなくて、それより前からずっと構想していた本なのですが、僕自身が、音楽の通常の活動をしていくうちに、どうしても美術と呼ばれているジャンルと接近するというか、そっちに入っていくってしまって、そこで起こる、びっくりというか、「えーっ?!」と思うことをまとめてみました。

一番びっくりしたのが、ギャラリーをただで見られるというのが超びっくりだったのですが、美術の人から見たら、ギャラリーに無料で入って当たり前ですよ。なぜかと言えば、ギャラリーというのは、もともとは絵を売る場所なので、入場料を取らずに絵を売ってなんぼという世界だということを知ってびっくりするぐらいで、僕は音楽を聴く際には、金払って入るんですよ、普通ね。ライブハウスでもコンサートホールでも、それはなぜかと言えば、帽子にお金入れてくださいというのと一緒だと思っているのですが、この音楽を聴くための経費をみんなでシェアしているという考え方だと思っていたのです。「美術はシェアするのではないのだ」というのが、最初のびっく



図1 シンポジウムでの大友良英氏

話を、今日しようと思うのですけれど。

今、いろいろなものが、縦割り行政じゃないですけど、それぞれの世界で成り立つようになってしまって、お互いを知らないという状況が起きている中で、「でも、ちょっとまずいんじゃないの？」というような問題意識は誰でも持っていると思うのです。その中で、この本を出しました。「音楽と美術のあいだ」という中には、実は音楽と科学のあいだも、当然入ってきて、美術と科学のあいだも入ってきます。「音楽と美術のあいだ」というと、そのあいだにすごい領域があって、そこで新しいことが起きていると思う話かなと思うかもしれませんが、そうではないのです。もちろん、そこにははやとしたあいだがあるのですが、言いたいのは、両者の関係を考えるということ、つまり間柄のことでもあるのです。だから、このあいだに何かを作るという話ではなくて、間柄をどうしていくかという本でもあります。

そして、これは「音楽と美術のあいだ」だけでなく、たぶんほかのものに置き換えても面白い話だと思うのです。

2. 技術はアートを変える？～エジソンが変えた音楽～

2.1 蓄音機という発明

今日、最初に見ていただきたい絵はエジソン (Thomas Alva Edison; 以下) です (図2)。なんでエジソンだよって、「音楽家が無理して科学の話をしようとしているな」的に思わないでくださいね。エジソンが耳にあてている聴診器みたいなもの、何だか分かります？これは聴診器ではなくて蓄音機です。



図2 エジソンの蓄音機を説明する大友氏

りでした。

それは音楽の世界と美術の世界の違いを知ってびっくりしたわけですが、僕は、かつて音楽というジャンルが、他のジャンルのものと分かれて世間に存在していたのではないと思っています。ところがいまは、音楽は音楽の世界、美術は美術の世界、科学は科学の世界というふうに、すごく分かれていると思っています。もともとは全部、実は一緒だったという

要するに、録音機を最初に作ったと言われてます。それには、いろいろな説が実はありますが、とりあえず、一般的にはエジソンと言われています。すごいですよね。電球も作ったし。

エジソンが、これを最初に発売したときに、どういうたい文句を言ったかという、正確な言葉は忘れちゃったけれど、要は「これでノートはいらなくなる」的なものでした。つまり、音楽を録音して販売するために作ったの

ではないのです。

音は振動ですので、当たり前だけれど、その振動を記録して、もう一回その記録をトレースしたら、振動として同じものが返ってくるだろうという原理です。簡単な原理ですけど、思いついたのは天才ですね。それをエジソンは製品化しました。これでノートがいなくなる。要するに、人が言っていることを一所懸命書かなくても「これでノートいらんやないの」と言えば売れると、エジソンは思ったのです。しかし、これが売れたのはノートがいなくなるから売れたのではないのです。もう皆さんもご存じの通り、音楽が聴けるから売れたのです。作った人の意図と違う形で売れる、あるいは一般化するということが、科学技術ではすごくよく起こります。

2.2 聴くという行為の変化

シリンダー型蓄音機から始まって、もう少し便利な円盤型のもの、つまりレコードができて、これが音楽をすごく変えていくわけです。これはすごく大切なポイントなのですが、この道具ができる前に人々は音楽をどうやって聴いていたかという、生の音楽しか聴いていないのです。それは、お祭りのときの旅芸人かもしれないし、お母ちゃんが子守唄を歌うでも良いけれど、音楽というのはそういう生のものとしてあって、村祭りで自分たちも祭り太鼓をやるとか、ヨーロッパだったら教会でオルガンを弾くとか、日本だったら、これは音楽とみんな認識していないかもしれないけれど、坊さんのお経とかもそう。つまり、音楽は「音楽だ」と言って存在していたわけではないのです。多くの場合、

一般の人にとっては、日常の中に音楽というものがいろいろあって、それはだいたいハレの時間をつくるものか、子守唄みたいに完全に日常の中に入っているものもあるし、子どもの遊び歌とかね。でも祭りのときだったら、太鼓が聞こえた瞬間からバーンと日常からハレの時間になるみたいな感じで、音楽は完全に日常の中というか、暮らしの中に組み込まれていて、音楽の授業なんか無いわけですよ、当たり前だけれど。要は、この技術が発明されるまでは、音楽は聴くものだけでも独立していなかったのです。普通の人にとって、

ここからが重要。僕ら音楽家は、どういう仕事をしているかという、専門に音楽を作って、それを録音して販売するか、テレビのバックにさせるか、ライブでやるか、いろいろありますけれども、おそらく、「私は音楽を聴いています」と言っている音楽の8、9割は、スピーカーの、紙の振動を聴いているのだと思うのです。最近はプラスチックですけど。

これって、かなり異常な事態というか、人類史上においては、エジソンがこんな機械を発明するまでは存在しなかった事態。正確に言うと、エジソンのときはまだスピーカーではなくて、振動の針が金属みたくにくっついているのです。その金属がスピーカーみたいに振動して、それをホーンで大きな音にしていたのですけれど、それが電気仕掛けになって、スピーカーを振動させるようになった。さらに電気仕掛けがもっと進んで、大きいスピーカーを巨大な電力で振動させなくても、皆さんの大部分が持っている携帯音楽プレーヤーで聴くことができるようになった。もはやCDプレーヤーですらない。そうやって、メディアの形はどんどん変わってきましたけれども、まずは録音して音楽を聴くということが珍しかったと思います。だけど、これが音楽の形をものすごく変えました。

2.3 録音は音楽をどう変えたのか

実は、この発明に音楽家は、この後百何十年、呪われていると言っても良いくらいです。だって、僕、稼いでいる仕事のほとんどは録音ですからね、あまちゃん²⁾とかも含めて。録音だけでなく、音楽は科学技術と深く関わっています。

まず世界中に普及した音楽が何かというと、西洋のクラシック音楽だったのです。これも科学技術、つまり譜面の発明なのです。譜面と印刷術。譜面は巨大な録音装置だと僕は思っているのです。要するに再生装置がオーケストラです。その再生装置を動かすのが指揮者。作った本人のベートーベンが行って演奏しなくても、バッハが行って演奏しなくても、バッハが作ったというアイデンティティのあるものは、どこに行っても演奏できる。大発明です。

そもそも音楽というのは、演奏する人しか演奏できなくて、その人が死んだら無くなってしまうのです。あるいは、それを維持するサークル、村祭りでも良い。日本の村祭りで盆踊りがあったとして、その音楽があったとしたら、その村が続く限り、その音楽は維持される。でも、そういうのを飛び越えて普及させようと、なんで思ったのでしょうか。それはきっと歴史を考えると、植民地をつくったのと同様関係あるかもしれない。そうやって常に、特に西洋の音楽は科学技術と結びついて、普及していった。ほかもちろん、いろいろな技術と結びついているのです。

レコードが普及する前には、人力で頑張った再生装置として、オルゴールや、それこそ大掛かりな自動演奏装置というものがありました。

では、レコードがなんで普及したかということ、すごく安い値段で、ものすごく良い音楽が聴けるからですよ。いずれにしろ、そうやって、人間ではなくて、音楽そのものを届けたいという欲望があったんだね、主にヨーロッパで。でも、エジソンがこんな簡単な機械を発明してしまったもので、オルゴールのように人力で再生装置を作り上げようという、その努力が減っていくわけ。それに入れ替わるように巨大産業になっていくのがレコード産業です。

レコード産業が盛んになることによって、まず音楽の長さが変わってくる。レコード盤の片面の演奏時間に、音楽を収めるようになってくるのです。そうすると、片面の長さ、2～3分という長さが平均な音楽の長さになってしまう。それまでは、セッションで延々演奏していたものが、それに収まるものが普通になり、今度はみんながそれを聴くものだから、音楽というものは2～3分だろうと思ってしまいます。

そして、演奏の仕方も変わってきます。初期の録音では最低音が入りにくかったのです。例えば、ジャズで言う最低音は、バスドラム（以下、バスドラと記す）です。最初ころは、バスドラをガンガン踏んでいたらしい。だけど録音する際には、そのバスドラの音が入ると、そこで針が全部飛んでしまうので、当時は後ろのほうに下げて小さく叩いて録音していたらしい。

今度は、それを聴いて育った人たちがどういう演奏をするかということ、バスドラをあまり踏まない音楽をやります。モダンジャズのころには、バスドラ、あまり踏んでいない。たまにアクセントで入れるだけで。それはなぜかと言うと、そのほうが自由になれたとか、いろいろ理由はあるけれど、たぶん聴いて育った音楽に、あまりバスドラが入っていないから。

2.4 音楽と共に身体性も変容する

ちなみに、後々、このバスドラが気持ちよく録音できる技術が出てきます。SP 盤³⁾ではなくてレコード盤⁴⁾、いわゆる僕らが知っているビニールで作られたものが普及してくる時代。その前は、レコードってビニールではないのです。SP 盤は陶器みたいなものだから、パーンとやると簡単に割れる。いわゆるバイナル盤が出るようになってくると、もうバスドラの音なんか平気でドンドン入る。そこで生まれたのがロックンロールです。ドッカンドッカン、バスドラが入っている。

そうすると、今度は、それを聴いて育った人が、低音が強いと、もっと気持ちよくなって踊りやすいぞって思うじゃないですか。それでバスドラの音がどんどん大きくなる。それで出てきたのがレッド・ツェッペリン⁵⁾ (Led Zeppelin; 以下) です (図3)。レッド・ツェッペリンは、もうバスドラ、ドッカンドッカン踏んでいて、実際の生音のバスドラとは全然違う音になっている。要するに、



図3 レッド・ツェッペリン

LedZeppelinChicago75 By more19562003 - <http://www.flickr.com/photos/more19562003/1263350387/>, CC BY 2.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=4571945>



図4 クラフトワーク

Kraftwerk_by_Ueli_Frey_(1976)

By Ueli Frey - <http://www.drjazz.ch/album/bilder/kw05.jpg>. The photo comes from the collection of Kraftwerk photos made by Ueli Frey., CC BY-SA 3.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=10498041>

もう録音でしか生まれ
ないバスドラの音にな
って、そうするとどう
なるかという、今度
はコンサートで、普
通に生でバスドラ鳴
らしていたのでは、
あの感じが出ない
ということになるの
です。だから、そも
そも大きい音のバス
ドラにマイクを突っ
込むわけです。それ
で、さらにスピーカ
ーで出すと、人が吹
っ飛ばすような音
が出るようになる
というのが、いまの
ロックです。これ
って、別に何かコ
ミュニケーション
しようと思ってい
なくても、勝手に
技術と音楽が、お
互いにすごい関
係を保っている
という、そこに
相乗効果があり
ますよね。

1970年代になると、機
械がビートを出せる
ようになります。こ
こで、ある年齢以
上の方は、クラフ
トワーク⁶⁾ (Kraftwerk ;
以下) というバンド
が出てきた衝撃を
思い出しますよ
ね (図4)。この人
たちはリズムマシ
ン⁷⁾ を発明したわ
けでも何でもな
いけれども、リズ
ムマシンをベーシ
ックなビートに
して、ポップス⁸⁾ に

した最初だと思います。テクノ⁹⁾ と呼ばれました。

もう僕、聴いたときに不愉快で。人間がやれよ、とか思ったのです。機械に音楽をやらすのなん
か、とんでもないと。いまは、大好きですけど、出たころは、すごく反発を感じたのです。こん
なの、人間がやれるものではないと思っていたのに、それから10年後、リズムマシンと区別つか
ないようにドラムを叩く人が出てくるのです。

人の感覚って、後戻りできないというか、クラフトワークが出る前にいたようなドラマーは、い

ま、現存しないですよ。それ以前の、例えばジャズとかポップスのドラマーは揺れ揺れなの。力を込める直前は、ちょっとテンポが長くなるし、どんな優秀なドラマーでも機械に合わせて叩けなかったと思う。でも、僕ら世代以降のドラマーは、ピッピッって、クリックを聴いて演奏することができる。つまり完全に機械に合わせて、演奏ができる。これはどっちが優秀とかではないです。それ以前のようなドラムを叩ける人は、僕以下の世代ではないです。アフリカとか東南アジアを探したらいるかもしれないけど、多くのプロフェッショナルの現場では、いまはもうリズムマシンのように叩く人しかいないかな。

何が言いたかったかという、メディアの技術が生まれることによって、そして、それが普及することによって、そもそも音楽自体だけでなく、人間の身体性までも変容していくのです。

3. 役立たない機械、再現されないレコード

3.1 ナム・ジュン・パイク

ナム・ジュン・パイク¹⁰⁾ (Nam June Paik; 以下)、皆さん、知っているかな。ビデオアート、メディア・アートの開祖と呼ばれています。彼のロボット、見てみましょうか(図5)。時は1960年代中ごろ、場所はニューヨークじゃないかな。これ、《K-456》(1963)と呼ばれているロボットです。具合が悪くて、全然、動きやしない、このロボット。ナム・ジュン・パイクが何をやりたかったかという、手間のかかるロボット、要介護ロボットですよ、いまの言葉で言えば。

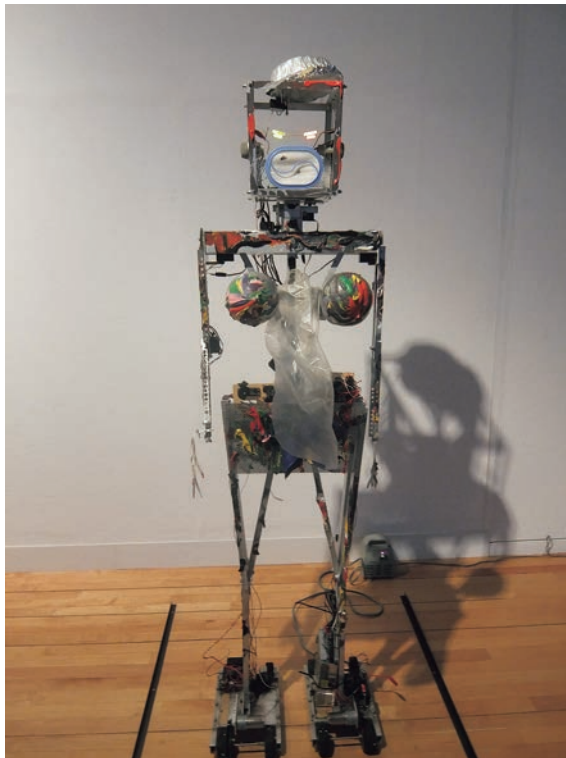


図5 「SIAF2017」で展示された
ナム・ジュン・パイク《K-567》(1993)

ロボットって、人間が少しでも楽をするために、人間の肩代わりをしてくれるように、つまり、役に立つように作られている。だけどナム・ジュン・パイクは、まったく逆というか、ダメなロボットを作った。何の役に立つかという、何の役にも立たないです。要するに、そもそも役に立つという基準が、ここには無いのです。

ナム・ジュン・パイクが亡くなってしまって、ロボットだけが残されるわけで、本当にいろいろ考えてしまう。美術って、どうということ？

なぜかと言えば、それまでの美術は、例えばモナリザを、なるべく当時のまま残さなければいけないと思うじゃないですか。だけど、これは展示されている時点で、「当時のまま」という止まった時間が無いのです。全部、動いているし、ナム・ジュン・パイクも壊れていっても良いと言っているし。こんなもの電化製品だもの、壊れますよ。その壊れたものを、ナム・ジュン・パイクが死んだあと、修理して良いかどうかすら判断する人がなくなった場合に、こういうメディア・アートと呼ばれているも

のを今後、どうしていくかというのが、すごい大きな課題です。だから、みんな怖くて、電源も入れられない。ナム・ジュン・パイクはもう死んでいるのに、「だれが責任取るの？」問題になってしまおうと思うのだけれど、いずれにしろ、ナム・ジュン・パイクが作ったのは、こういうものがすごく多い。

そして、実は僕らは、無意識のうちに、こういうものにすごい影響を受けている。

3.2 クリスチャン・マークレー

もともと、僕が美術というものに強い関心を持ったのが、今度、「SIAF2017」にも来るのですが、クリスチャン・マークレー¹¹⁾ (Christian Marclay; 以下) (図6) の《Record Without a Cover》(1985) という作品に出会った時です。

どんな作品かという、片面しか溝が刻まれていなくて、片面は Record Without a Cover と書いてあって、更に「このレコードはカバーに入れないでください」と書いてある。

これ、たぶん、500枚しかプレスされていないのだけれど、日本のレコード屋さんに1985年に入ってきて、たまたま僕もそこにいて、「傷物ですね」って言って安く手に入れました。当たり前です。レコードがカバーに入っていないのだから。でも僕、クリスチャン・マークレーは既に知っていて、情報を知っていたのですが。

これって、溝の入っているほうの面の前半は、音が入っていないのです。ただ、溝だけ。実は、オリジナル版を聴くと、プチプチという音が入っている。要するに、レコードに傷がついた音。だけれど、輸送中に傷がついているものだから、もともと入っている音なのか、輸送中に傷がついた音なのか分からない。そのことに、超感動したのです。

ここで、エジソンの話に戻ります。それまで、レコードというのは、なるべく生演奏に近いものを届けるメディアとしてあったのです。なるべく、目の前で人が演奏しているという状態に近づけていくのが、技術の進化だったわけです。なんでそうしたかという、世界中、同じものを聴けるようになったほうが良いと、20世紀に人類は思ってしまった。なるべく公平に、みんなに文化が行き渡ったほうが良いと。

そういうものに対して、クリスチャン・マークレーのレコードは、別に同じものを聴かないで良いんじゃないの、ということを示したわけです。レコードを聴くという体験が、音楽を聴くという体験ではなくて、レコードそのものの存在を聴く体験になるということを、初めて経験したのです。ここでは、レコードされているものと、されていないものの区別がつかなくて、「僕らがこれまで聴いていた音楽ってなんだったの？」と考えるきっかけになったのです。

それまで、ただ音楽バカだっ



図6 クリスチャン・マークレー

Cmarclay By DanKassem at en.wikipedia - Transferred from en.wikipedia to Commons by User: Motopark using CommonsHelper., CC BY 3.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=5783014>

た僕が、そうじゃないものに目を開いて、ナム・ジュン・パイクを知ることになったのも、このレコードが始まりでした。

4. 新しい音楽は現象だ！

4.1 毛利悠子



図7 「SIAF2017」で展示された
毛利裕子《そよぎ またはエコー》

だけど、自分で美術的なものをやろうとか、まったく思っていませんでした。やっぱり音楽が好きで、ノイズと呼ばれるような現代音楽をずっとやってきました。そんな僕が展示とかに興味を持つきっかけとなったのが、2005年に全く無名のアーティストの展示を大阪で見た時です。

これはそのうちの一人、毛利悠子¹²⁾さん(図7)の作品です。これ、四角形のアンテナとコイルのようなものがついていますね。

このコイルみたいなものが、音を出しているのです、ピーッ

という高周波を。すごくかすかに。入った途端に「なんだ、この高周波」と思って、近づいたら、コイルとアンテナみたいなものがあるだけ。それで、電源とか音源に結びついて、このコイルなりをスピーカー代わりにしているのだらうなと思ったら、電源がどこにも無いのです。電池すら無い。一応、僕、電気屋の息子だったので、電気のこととはちょっと詳しくて、自分でも電気楽器をやるので、こういうの、気になってしょうがない。

すると作家の毛利さんが、「あ、電源気になるんでしょう、大友さん。これ電源ないんですよ。コイルって発電するでしょう。これ自体が発電して、ピーという高周波を出してるんです」って説明してくれたんです。俺、これ見た時、すごいこんな音楽家が出てきたか！って思った。とうとう音楽も、ここまで来たかと。

4.2 梅田哲也

毛利さんの作品の隣の部屋には巨大な、梅田哲也¹³⁾(図8)という人が作ったバルーンがあった。その巨大なバルーンにはヘリウムガスが入っていて、その奥側にスピーカーを置いて、耳に聞こえるか聞こえないかくらいのギリギリの重低音を、そこで出しているのです。そうすると、どうなるかと言うと、レンズを使って像をひっくり返すように、音の波形が、つまり音の位相が、そこでひっくり返るんです。これは多分、素人には分からない。この作品では重低音の位相が、風船の近くになるとひっくり返るんですが、自然界ではまず起こらないのでびっくりしました。作家の梅田さんが不思議そうにうろろしている僕を見て、「初めてです。気づいてくれたの」って言ってて、超分りにくい作品なのです。



図8 「SIAF2017」で展示された
梅田哲也《わからないものたち》

体感で言うと、一番近いのは、トンネルに入ったときとか、高層ビルのエレベーターに入ったときに、耳がちょっと詰まるでしょう。あれに近い。一番近い体験は、あれなのですけれど、その、すごい微弱バージョンが起こる。普通、きっと誰にも分からないけれども、僕は「また、こんな音楽家が出てきた！」と思ったのです。

それは、僕にとっては、とても大きな体験で、ここまで音楽が来たかと。彼らは、別に音楽をやっているつもりないのですけれど、こんな面白い音楽があるのだったら、楽器やめようと

思ったくらい衝撃を受けたのです。それが無かったら、本当に、この場にはない。それ以降、僕も展示作品とかをやるようになるけれど、彼らには、まったく、いまだにかなわない。

4.3「役立つ」という発想

音楽をやっていて、よく聞かれるのですけれども、特に震災後、福島で演奏会などをやろうものなら、新聞社の人が必ずやって来て「大友さんは何を伝えたいのですか」と言うのです。あるいは「何を表現したいのですか」と。新聞社の人の答えは決まっている。「復興を応援したい」って答えてほしいんだよね。あるいは「これによって人々に元気を」とか。

だけど、そんなことを考えている音楽があったとしたら、面白くないよ。何かを伝えたくて音楽をやっているわけではないと思うのです。伝えたいことがあったら、携帯で電話したほうがはるかに速い。伝えるために、何かをやっているのではない。でも、明らかに何かは伝わる。それは間違いない。けれども、具体的に「この情報をここに伝えるためにやる」のがアートでは、決してない。

世の中は、役に立つとか、何を伝えたという情報の伝わり方だけで判断することがとても多いです。そして、これは科学についても同じことが言えると思っています。最近、ノーベル賞を受賞した方¹⁴⁾が、インタビュアーに「これ、何の役に立つのですか」と聞かれて、びっくりした顔をした。たぶん、役に立つということを聞かれるとは思っていなかったのだと思うのです。

同じように、量子がどうなっているとか、電子の動きがどうなっているか研究している人は、それが具体的に、将来、役に立つだろうと考えて研究しているのでは、たぶん、ないと思うのです。きっと、わかったことをもとにして、役には立っていくのだろうけれど、でもまずは、その現象を知りたいから、面白いからやっているのだと、僕は思っているのです。科学者になったことないから、分かんないんだけど。

アートもそれに近いと思っていて、毛利さんや梅田さんの作品は、その現象を起こすこと自体が面白いと感じて生み出された作品だと思います。「この現象がなんで起こるのか」と考えると、たぶん科学者のほうに近づいていくと思うのですけれど、アーティストの場合は「とりあえず現象が起こるから何かしよう」ってなるんでしょう。「とりあえず現象が起こるから何かしよう」が「役立つ」

という方向に向かうと、もしかしたら製品が生まれたりするのかもしれない。

ただ、この「役立つ」という発想はとても危険だと思っていて、震災後に本当に感じたことなのですけれども、人が考える「役立つ」の背景には、現在の社会に何が必要かという思想が必ず入っています。しかしもう少し引いた視点で考えると、現在の「役立つ」が未来の「役立つ」につながるとは限らないと思っています。

もちろん「役立つ」という方向で考える人も本当に必要。それがいないと、たぶん、社会は崩壊してしまうけれど、「役立つ」という方向だけに持っていっても、社会はやっぱり崩壊すると思っています。

だから、神や妖怪の存在を信じることによって、人類自体を相対化するような想像力、つまり人間の想像力が、そんななんだか分からないものに対して開いていくことによって得られる豊かさの方が、僕は尊いと思っています。

5. 深く掘って行く人、鉱脈をつなげる人

5.1 コミュニケーターの役割

話を、「科学とアートのコミュニケーションが始まる。」というところに戻すと、僕はアーティストがアーティストだけで何かやらないことが重要だと思っています。アーティストだけで何かやると、とてつもなく難解なものになっていくはず。それはもう、僕がノイズやっているからよく分かる。面白すぎて行くところまで行くのです。だけど、とてつもない難解なことをやった先には何があるかと言うと、周りに人がいないのですよ。僕だけが楽しい世界。

アーティストだけでなく、専門家と言われる人たちは、とても極端な方向に穴を掘りがちだけど、その過程で、いっぱい捨てていくものがあると思うのです。そこで捨てたものの中にも、実はいろいろな鉱脈があって、本当はどっちにでも穴は進めるはず。専門家が、穴を掘った揚げ句、もう、そこでしかない世界になってしまうというのは、僕はとても嫌で、そうではない鉱脈をちゃんと、いろんな方向に見つけて、開いていかないと、たぶん社会は成立しないと思うのです。

例えば、科学で現象を掘り下げていくことも大事だけど、アートのように現象を見せていくと言う方向に、開いていてもいいように。

難解な世界と普通の社会がある、というだけでなく、本当は、その間にものすごく豊かな鉱脈や、ほかの世界に通じる鉱脈みたいなものがあるはずなんです。ただ、その世界同士をつなげている鉱脈を素人が発見するのはとても難しい。極端の世界の間にある豊かな鉱脈をつないでいく役割ができるのが、コミュニケーターなのではないかな、と思うのです。プロのコミュニケーターは、専門家の方ばかり向くのではなくて、そうではない人の方も向きつつ、色々な世界に通じる豊かな道を発見していかないといけないんです。多分、深く掘っていく人は、それを発見できない。

これは、科学とアートのあいだだけではないです、美術と音楽のあいだでもそう。あらゆる分かれちゃってる二つのものの間にある鉱脈をつなげる人がコミュニケーターだと思います。

5.2 未来へつなげていくために

もう一回、最初の話に戻ると、エジソンの発明は本当に素晴らしかったし、さらに科学技術がどんどん深まっていった、生演奏と変わらないくらいの音楽が聴けるようになりました。そのおかげでビートルズ (The Beatles)¹⁵⁾ も聴けたし、ジョン・コルトレーン (John Coltrane)¹⁶⁾ も聴けたし、それはそれでとても良いのです。でも、その技術を極めたことによって、何が起ったかと言うと、音楽という世界が、完全に音楽だけで完結する、商売的にも分断した世界が起った。

でも、最近、レコードとか売れなくなりましたよね。もう音楽産業も成り立たなくなっている。そのときに、初めてみんな気付くのです。「いやいやいや、でも、ちょっと待って、そもそも音楽って、本当にレコードだけだった？」と考えたときに、エジソンの顔が見え、エジソン以前の顔が見えてくる。音楽を録音して売ること自体が、かなり異常な事態だったわけです。本当は音楽って、そういうものではないよねと。

でも、もう僕らはエジソンの発明前には戻れない。では、音楽の次を見据えるためには、どうするのかというと、単線的に音楽の発達の歴史から予想するのではなくて、エジソン以前の世界や日常的な音楽、そしてきわめて個人的な歴史をつなげていく。これは音楽のことだけではなくて、いま同時にある地平の中で、同時に起こっている科学のこと、あるいは美術のことでも良い、そんなことをつなげて複合的に未来を見ていく必要があると思うのです。はい、終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

注

- 1) 吉増剛造 (よします ごうぞう 1939-)。詩人。日本を代表する現代詩人のひとりで、詩の朗読や詩作を物質的に扱うパフォーマンス表現も行う。札幌国際芸術祭では、北海道大学総合博物館において石狩川をモチーフにした詩とそこでの表現活動を組み合わせた《火ノ刺繍-『石狩シーツ』の先へ》を展示した。
- 2) 2103 年度上半期に制作された NHK の朝の連続テレビ小説。ヒロインの天野アキがアイドルを目指すというストーリーのため、200 曲以上の劇中音楽が制作され、それらを大友氏が担当した (Doda)。
- 3) 1900 年代中頃まで使用されたレコードの形式。Standard Playing の略称。シェラック樹脂を使用し、衝撃に弱い。
- 4) 現在主流となっているポリ塩化ビニールで出来た LP 盤を指している。LP は Long Playing の略。バイナル盤とも呼ばれる。SP 盤に比べ、割れにくく丈夫。
- 5) レッド・ツェッペリン (Led Zeppelin)。1968 年に結成されたイギリスのハードロックバンド。1980 年に解散した。
- 6) クラフトワーク (Kraftwerk)。1970 年に結成された電子音楽バンド。電子楽器を導入し、「テクノ」, 「テクノポップ」と呼ばれるジャンルに大きな影響を与えた。
- 7) リズムを自動的に演奏する装置。ドラムマシンとも呼ばれる。
- 8) クラシック音楽以外の、広く大衆に受け入れられている音楽。ポピュラー音楽を指す和製英語。
- 9) リズムマシンやシンセサイザーなどの電子楽器を使用した音楽。
- 10) ナム・ジュン・パイク (Nam June Paik 1932-2006)。時代に先駆けてテレビとビデオを用いたアート作品を発表し、メディア・アートの先駆者として知られている。
- 11) クリスチャン・マークレー (Christian Marclay 1955-)。現代音楽家であり、アーティスト。ビデオ作品の《クロック》(2010) が 2011 年に第 54 回ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞を受賞し、現代美術家としても著名。
- 12) 毛利裕子 (もうり ゆうこ 1980-)。日本の現代美術家、物理現象を用いたサウンド・インスタレーション作品を発表している。
- 13) 梅田哲也 (うめだ てつや 1980-)。日本の現代美術家、サウンド・インスタレーション作品を発表している。
- 14) 2016 年にノーベル生理学・医学賞受賞を受賞した大隅良典 (おおすみ よしのり 1945-) 氏を指す。大隅氏は、毎日新聞のインタビュー内で「サイエンスは、どこに向かっているか分かっていないから楽しいのです。少しでもゆとりをもって基礎科学を見守ってくれるような社会になってほしいと常々思っています。また、「役に立つ」ということは、社会をダメにしていると思っています。科学で役に立つということが、数年後に起業できることと同義語というのは問題です。本当に役に立つのは 10 年、20

年, 100 年後かもしれない。」と答えている (毎日新聞 2016)。

- 15) ビートルズ (The Beatles). 1960 年にイギリスで結成されたロックバンド. 音楽だけでなく, 当時の若者文化全般に影響を与えた. 1970 年解散.
- 16) ジョン・コルトレーン (John Coltrane; 1926-1967). アメリカのジャズサックス奏者. 大器晩成で早逝の天才と称される.

●文献:

大友良英 2017: 『音楽と美術のあいだ』 フィルムアート社.

Doda: 「大友良英 01 / 職人矜持篇」『ヒット人メーカー』, <https://doda.jp/hithitomaker/ootomo/shokunin/> (2017 年 11 月 10 日 閲覧).

毎日新聞 2017: 「医学生理学賞 大隅良典さん「オートファジー」研究軌跡 人がやらぬこと, 地道に」『毎日新聞』, 2016.10.15 <https://mainichi.jp/articles/20161005/ddm/010/040/024000c> (2017 年 11 月 10 日 閲覧).